

『カーストと平等性』の背景と

これからの展望

田辺明生

発展途上国に関する優れた著作に与えられる「発展途上国研究奨励賞」(アジア経済研究所主催)も三二回目を数える。今年には京都大学大学院教授田辺明生氏著『カーストと平等性 ―インド社会の歴史人類学』(東京大学出版会)と二橋大学教授岩崎一郎氏および帝京大学講師鈴木拓氏の共著『比較経済分析 ―市場経済化と国家の役割』(ミネルヴァ書房)の二作品の受賞が決まった。去る七月一日に表彰式に引き続き、田辺、岩崎両氏の受賞記念講演が行われた。今月号では田辺氏の講演内容をお届けする。

京都大学の田辺明生です。このたびは伝統のある栄えある賞をいただきまして、本当にありがとうございます。

本書は、私が大学院に入ってからずっと従事してきたインド研究のひとつのまとめで、東京大学に提出した英文の博士論文を基にしたものです。学生の多くから日本語で書いてほしいという声がありまして、日本語での出版に至ったものです。

私としては、力が入り過ぎたと

いうか、今までの成果を良くいえば総合的に、しかし悪くいえば、何でもかんでも突っ込んだようなところがありまして、自分でももうすこし整理できればよかったですと思っています。

当の学生からも、「むずかしくてよくわかりません」といわれて、ちょっと困っているところですが、しかし、このたびおかげさまでこのような栄えある賞をいただいたというところで、学生ももう一遍読んでみようかと思ってくれるので

はないかと期待しています。こうした分りにくい本をご評価いただいたことに重ねて心からお礼を申し上げます。

それでは、これから本書について、できるだけ分かりやすく、やや単純化した形で、どういう背景があつて私が本書を書こうとしたのか、そして、本書においてどのようなパスベクトイブの下に議論を展開していこうとしたのか、そしてこれからのいかなる研究を展望しているのかということについて

て、お話をさせていただきたいと思います。

● 遍在する真理

―南インドでの経験

まず、個人的な経験からになりますが、私は岡山の一宮高校から、途中、イギリスの国際カレッジ―それはユナイテッド・ワールド・カレッジというところだったので―へ行き、そこでインドのムンバイ(当時ボンベイ)のカレッジとの交換留学をする機会に恵まれました。一八歳のときでした。

私はできることならば当時の大問題であった東西問題、あるいは南北問題のどちらかに寄与することができるよう人間になりたいと考えており、イギリスのカレッジにいたときにも、学友たちと日夜、東西問題や南北問題について議論したことを覚えています。

インドには途上国の現状を知りたいという思いから行ったのですが、インドに行つて非常に大きな衝撃を受けました。今日はそのなかで二つのエピソードだけお話ししたいと思います。

私はムンバイから、南インドのマドuraiという都市の郊外にある孤児院に行きました。そこで私たちは社会奉仕の一環として、水牛の水浴びをする池を掘るように



いわれました。最初は張り切って、さあやるぞと思ったのですが、掘る道具といえば、長い鉄が一本とお皿だけです。鉄の棒でほじくっては手で土を集め、そのお皿を頭の上に載せて土を運ぶというような繰り返しで、いつまでたっても水牛が沐浴できるような池はできそうにありません。そして、この地域は暑いのです。冬の一二月でしたが、この地域には三つの季節があると冗談でいわれる、hot-hotter-hotterの少なくともhotであつたことは間違いありません。すぐにへたばつてしまいました。

「何を食べるの」と話し掛けてくれて、孤児たちと遊ぶうちに私たちもだんだんとリラックスしてきて、自分たちの本来の姿にだんだん気付かされて、非常に恥ずかしい思いをしました。

そのときに、北が南を援助し、すくい上げるような態度では駄目だということを感じました。フィールドにいる人たち、現地の人たちが主人公なのだということ強く思った次第です。

もうひとつ、インドに行つて驚いたことがあります。それはムンバイの港の近くにあるエレファント島に行つたときのことです。そこには大きなシヴァ・リングがあります。シヴァ・リングというのはシヴァ神の象徴ですが、PTAのガイドの方が「これは絶対真理の象徴です」とおっしゃつたのです。私は非常に生意気な一八歳の子どもでしたから、「絶対真理」というものがあるとすれば、それはこんな相対的な形で表されるものではない」といったのです。そのときに、その方が、「いや、絶対真理というのは超越的であり、また遍在もしている」といいました。真理というのは、一であると同時に、多なる形としても現れるのだということをおっしゃつたわけです。それが私にとって非常に

衝撃だったので。

考えてみると、それまでの私は東西問題にせよ、南北問題にせよ、何かひとつの答えがあるのだと思つていて、それを一生懸命探そうとしていました。しかし、インドで出会つた思想、そしてインドにある生活世界というものは、それよりもずっと強靱かつ深淵なものを持っていると感じたのです。確かにひとつの真理というものはあるだろう。しかし、そのひとつの真理というのは多様な形をとつて現れる。反対に言えば、多様な形を通じてのみ、私たちはそうしたひとつのものに到達できるのではないかということをおぼされたわけでした。

そして、おそらくそのことは単に宗教的な哲学、思想というだけでなく、私たちが人間の発展とは何かということを考えるときにも必要な考え方ではないでしょうか。つまり、ひとつの答えを地球上に適用するのではなく、それぞれの地域の生態、社会、文化、政治経済の形に合わせた発展の形を考えなければいけないのではないかということです。

●固有性への感受性

これは今、私の考える地球社会における多と一の問題とも通じる

と思います。それぞれの多元的な地域があり、その地域に生きる人びとが主人公である。しかし、同時にそれが単なる相対主義に陥つてはならないのであつて、私たちはひとつの地球に生きており、同じ環境問題、安全保障や資源・エネルギーの問題を共有しているということも忘れてはなりません。

これは、別の言い方をすると、固有性への感受性と普遍性への想像力の両方が必要なのではないかということだと思います。これは国際開発を考える上でも重要なことではないかと考えています。

つまりこのことは、それぞれの生きる主体が自己の生き方を探求できる場をつくっていくという地球社会共通の課題に対して、地域の固有性に対するセンシティブティを持ってアプローチするということだと思います。簡単にいうと、「ばらばらで一緒」に生きられる地球社会を、どのように創造できるかということだと思います。そのためのアプローチのひとつが、人類史を、ひとつの目的、あるいはゴールに至るようなものとしてではなく、地域ごとの多元的な発展経路とそれらの交流と交換の過程として考えることではないかと思つています。複数の発展経路はばらばらにあるのではなく、つながり、連鎖

のなかにあります。ですから、多元的な発展径路、地域や文明というものを、比較と連鎖のなかで見えていく必要があります。

そのなかで、私はインド、南アジアの研究をしていますので、南アジアの発展径路はどのようなものかを明らかにし、それがこれまでの西洋型の発展径路や、東アジア型の発展径路とどのように異なり、あるいは同じなのか。また、南アジアがそのほかの地域とのつながりのなかで、どのように発展してきたのかを考えていきたいと思っています。こうした広い問題意識のなかの一端を、本書で明らかにしようと思いました。

●多元的な知識・技術を蓄積する機能をもつカースト制

では、この南アジア型発展径路はどのようなものでしょうか？ 私は、その特徴は、労働の結果を社会的に蓄積するしくみにあったのではないかと考えています。つまり、労働の結果を設備資本や金融資本の形で貯めるのではなく、むしろ多元的な知識や技術といったソフトウェアの形で社会のなかに貯めていく。しかも、それをカーストといわれる専門集団のなかに蓄積していく。私はこの本のなかで、一八世紀オリッサにおける職

分権体制という、分業と分配のシステムについて論じていますが、その分業と分配の基礎となつていのが職分権を持つ家族であり、ジャーティ集団（カースト）です。ひとつの集団が専門的な知識や技術を蓄えていく。そして、社会全体で見ると、多元的かつ専門的な知識や技術が蓄えられていく。インド史の特徴は、食料の生産活動に直接従事する人口が少ないことです。別の言い方をすると、一次生産からの剰余を知識や技術に、今の言葉でいうとサービス産業の方に向ける形で、文化、社会の発展を目指したという発展径路があったのではないかと考えています。

インドというと、私たちは環境が非常に厳しいと考えがちですが、もう一度冷静な目で見て考えると、中国と並ぶ、世界の大農村地域であり、熱と水に恵まれたところなんです。そこから生まれた経済剰余によって共同体内分業をしている。カースト制というと、私たちは差別、抑圧といった面だけを見がちですが、カーストは別の見方をすると、共同体内分業によって行政のスペシャリスト、軍事のスペシャリスト、学芸、技芸、工芸のスペシャリストなどを育てていった制度でもあるわけです。こ

うして、非常に多元的で専門的な知識・技術を社会全体で養っていました。

農民以外のさまざまなカースト（戦士、書記、大工、油屋、医師、学者、芸能家など）が地域共同体や国家に支えられながら、それぞれの専門的な知識や技能の継承と発展に従事した。これによってインド社会に特徴的な、文化的な多様性が保持され、発展した、と考えています。

これはつまり、一なるものを一なるものそのままとして、ひとつの同じ目的を全体に与えようとするよりも、そうではなく全体としての発展を目指しながらも、それを多元的な社会集団に任せることによって、非常に多様な形での人間の可能性を、社会全体として継承・発展していくような発展径路ではないかと思えます。

そうしたしくみのなかで、私が最初にインドに行ったときに非常に魅力的に感じたさまざまなものの形、インドのテキスタイル・アパレル産業を支えるデザイナーや、観光産業を支えている建築や彫刻など、いわゆるソフトウェアの強みがインド型の発展径路に現れてきたのではないかと考えています。

●植民地以前のインド社会の姿を解明する

私が拙著でなした仕事のひとつが、そうしたカーストによる分業と分配の制度のありかたを前植民地期から明らかにしようとするこゝとでした。一八世紀のインド地域の社会の社会体制はまだあまりわかっていないのが現状です。これまでの多くの研究は、一九世紀の植民地行政資料に基づいたものでしたが、私はどうしても一八世紀前植民地期の社会体制を知りたいと考えました。一回目の長期フィールドワークでは、残念ながら資料はみつかりませんでした。幸いなことに二回目の長期フィールドワークのときに、この本で扱った貝葉文書に出会いました。これはパームリーフ・スクリプト（ヤシの葉文書）ともいい、東南アジアやインドなどで教典や行政文書を書くのに用いられたものです。この行政文書により、私が「職分権体制」と呼ぶ組織において、どのような人がどういう職分を果たして、どの程度、共同体の生産物の配分を受けているのかについて、その詳細を明らかにすることができました。

これまではカースト制というと、一部の上位カーストが土地を占有

して、下位カーストは地主カーストによって搾取されたというイメージがありますが、それはむしろ一九世紀のインド社会の姿に近いものです。わかったのは、一八世紀は土地所有制に基づく支配体制ではなく、むしろ取り分権の体制であったことです。それぞれの人あるいは世帯が自分の職分権という権利を持ち、自分の職分を果たし、共同体の生産物から一定程度の取り分を得ていました。

しかし、もちろんその取り分には大きな格差がありました。経済的なヒエラルヒー、階層性ということがあったこともまた事実です。私は、一八世紀のインド地域社会において、経済社会的な階層性、それから宗教儀礼的なヒエラルヒーがあったことを決して否定しているわけではありません。むしろそれらの存在は明白です。しかし、それと同時に、下層民は、一方的に搾取され、差別されるというだけではなく、彼らの生存基盤を確保するようなシステムがあったということも申し上げたいと思います。一八世紀は「不可触民」とよぶ黄金時代であったという歴史家がいるほどで、一九世紀以降に比べると、土地に比して耕作民が不足していたということもあり、取り分は保証

され、生活はより安定していたのではないかと考えます。そうした状況を明らかにすることは、この職分権体制の存在と相まって、インド社会のイメージを大きく変えるものとなるのではないかと期待しています。また、ある共同体のなかでの取り分の体制があったというだけではなく、もちろん贈与や分配は非常に根幹的ですが、これが、一八世紀当時のより広いインド洋交易の存在と補完的な役割を果たしていたことも注目されます。一八世紀においてインドは、綿布の世界第一の輸出国でした。多くの綿布がベンガルや南インドからヨーロッパに行っています。オリッサにおいても綿布が生産され、たくさん輸出されていました。そのなかで原料の棉花を育て、棉すきを行い、そこから綿糸を紡いだのは女性や低カーストの人たちでした。綿布のインド洋交易という広いネットワークのなかで、後背地の田舎の女性や低カーストの人がその経済活動に参加できるシステムがあったわけです。

おもしろいのは、綿布を織っていた織工 (weaver) たちや、貿易に携わった商人たちは、地域社会での職分権を多くの場合持つていませんでしたが、地域社会に対して高額な税金をしはらっていた

ということですが、つまり、このビジネスから得たもうけの一部を地域社会に還元していたのです。こうした形で、地域社会とインド洋交易が、いわば補完的な形で展開していったと理解しています。

一八世紀の近世の国家の行政の発展ということも、この職分権体制は結び付いています。職分権体制の詳細が記録され、王国は職分権を通じて末端の社会を管理しました。これは、近世の国家の行政技術の発展を示すものです。こうした行政の合理性の進展とカーストを基盤とした職分権体制とは矛盾するのではなく、むしろ補完的に発展したものであるということがご理解いただけるかと思えます。

●多元的社会を可能にするカースト

こうした前植民地期のカーストの姿が明らかになるなかで、カーストというものの理解を私たちは見直さなくてはいけないのではないかと、と思うようになりました。

カーストという多元的社会集団を基礎とした分業と分配の社会制度は、単に差別と不平等のシステムであるという理解で足りるものではなく、それは、さまざまな社会集団が固有性を保ちつつ生存する場所と機会を確保する制度でもあ

りました。インド社会に差別や抑圧の側面はたしかにあります。同時に、そこには他者の存在を承認する、存在の平等性という価値が、多元的社会共生を支えていると考えています。そういう意味で、拙著のタイトルも、『カーストと平等性』というちよつと挑発的なタイトルを付けさせていただきました。カーストの見直しをしていただきたいということが背景にあつたわけです。

まとめますと、インドの前植民地期の発展経路は、多元的社会集団の共生を可能にし、多様な文化、知識、技能を社会的に蓄積していくこととするものであつたということですが、そして歴史的にいうならば、カースト間関係にはヒエラルヒーと差別はたしかにありますが、同時に多元的社会が、同時にならば、多様な知識や文化を継承し、発展させ、全体としての生活環境を向上するというポジティブな側面があつたことも間違いないと考えています。そして、そうした多元的共生を価値的に支えていたのが、「存在の平等性」であつたと思います。「地位のヒエラルヒー」と「権力の中心性」という価値が、現象世界の支配構造を支えていたとすれば、「存在の平等性」という価値が多様性の尊重と協力を確

保する

保してきた。この「存在の平等性」

という価値は、インド哲学や宗教学においてはこれまでおそらく一番重視されてきたものです。古くは、ヴェーダの「汝はそれ（ブラフマン）なり」「我は梵（ブラフマン）なり」という言葉があります。汝が梵であり、私も梵であるということは、すべての人は梵である、存在的には平等である、ということにほかなりません。これは、「誰の心にも仏さまがいらっしゃる」という言い方で、私たちにも親しい考え方を、私たちも仏教を通じて、インドからとり入れているのです。ただし、こうした存在の平等性という価値がどのように政治、経済、社会と結び付いているかについては、残念ながらこれまで十分に議論されてきませんでした。私はそれに注目したわけです。

●植民地化によるインド社会の分化

こうした存在の平等性の可能性がどのように、今一度民主化のなかで再登場しているのか、に注目したのが、これからの展開になります。その前に、まずは植民地期において、インド社会がどのように変わっていったのかをお話しす

る必要があります。

一八世紀において多様な生業を持っていた諸カースト集団は、一九世紀に入るとだんだんと農業化、農民化していきます。これは植民地経済のなかで、インドが第一次産品国になっていくという状況と係わっています。商品経済の発展とともに、農村での商品作物の栽培により多くの人が従事するようになり、テキスタイルなどの手工業品の生産が限定的になりました。これは産業革命（工業化）を経たイギリスから多くの布が入ってきたという事情とも関わります。

在地の工業や工芸が縮小し、世界の経済構造のなかでインドは農業国、第一次産品国、後進国として位置付けられていく状況がありました。同時に、植民地支配のなかで、耕作地には私有権を設定され、それを持つ者が税金をイギリス植民地政府に払うというシステムができます。この過程で、一九世紀に下層民が得をしたのか損をしたのかについては議論があるのですが、私の地域においては私有化が始まることにより、下層民は無理やり土地を売られる形で、どんどん土地を失っていきます。上位カーストが土地を占有し、下層民が従属するという、オリエン

タリスト的なインドのイメージに一番現実が合致したのは、実は植民地支配が始まった19世紀前半のことであつたのです。

他方、イギリス植民地政府もさまざまな開発政策をとりました。都市では特に一九世紀後半から二

〇世紀初頭にかけて工業化も進み、英語教育を受けたエリートが多く育っていきます。しかし、ここで何が起こったか？ エリート中心、工業中心、都市中心の世界と、農村と農業を中心とし、伝統的な共同体を基盤とする世界とが分かれたままで展開していくという状況が起こりました。これがいわゆるエリートとサバルタン（下層民）の分断といわれるものです。ただ、下層民といっても、インドでは非エリートの下層民の方が圧倒的多数を占めていました。こうした近代対伝統、西洋対インド、都市対村落、エリート対民衆、そして政治経済対社会文化というような二分法が成立したのが植民地時代だったわけです。そして、この対立が、実は私たちの学問にも反映されており、政治経済の方は社会科学がやり、社会文化の方はその他の人文科学（宗教学、社会学、人類学）がやるという分業になつてしまふ。こうした学問の状況自体も、私は植民地的なもの、

あるいはポストコロニアル的なものと考えており、それを何とか超克したい、乗り越えたいと考えて、政治経済とともに社会文化を考えるとという仕事をしようとしたつもりです。

●ポストコロニアル的インドを親を超えて

植民地期が終わつた後も、植民地期につくられた構造は継続していきました。それを私たちはポストコロニアル、あるいはポスト植民地的というような言い方をします。ポスト（後）ではありませんが、実質的には植民地期につくられたような統治機構（政府、裁判所、警察など）が持続し、土地所有およびバラモンのヒエラルヒーと連動した階層的社会構造、そして都市エリートと農村サバルタンの分断、また、植民地主義的な認識枠組み—インドは非常に階層的で、偶像崇拜が存在するまだ文明化していない地域であり、イギリスこそが合理性に基づいた文明をもたらすものであるといった考え方が続いた時代でした。そして、そこにおいて、伝統インドを守るのか、あるいは、近代西洋に基づいた新しいインドをつくるのか、思想的にも二つの流れが対立したままの状態が、ポストコロニアルの

時代であったと思います。

学術上の研究課題も、こうしたポストコロナの時代性を反映していたと思います。私が大学院でインド研究を始めたころの一九八〇年代末には、なぜ南アジア諸国には貧困や差別や紛争があつて、開発と民主化が進まないのかというのが大きな問いでした。そして、それへの答えが、しばしば、インドにはカースト差別や宗教断があるから、つまり、インドにはインドの伝統文化というものがあるから開発が進まないのだというものでした。私がインドに感じた魅力と、当時語られたインド論とのあいだに、大きなギャップ、齟齬、違和感があつたことを覚えていきます。

こうしたギャップをいかに乗り越えていくか、私一人の力でもちろん全くできないわけですが、学問が進むよりも前に、現状が変わっていききました。特に一九九〇年代から、インドの民主政治の活況、経済的な成長がどんどん進んでいきます。現在では、高い経済成長のもと、民衆の政治参加が大きく進んでいますし、世界の政治経済におけるインドの存在感も非常に高まっています。

このなかで、私たち研究者も問いを大きく変容せざるを得なくな

りました。これまでは、「なぜインドは発展しないのか」だったという問いだったのですが、「なぜインドはこれほどの政治経済的活況を呈しているのか」という新たな問いに答えねばならなくなつた。インドにカーストや宗教がなくなつたから民主化や経済化が進んだのかというと、実情は全くそうではありません。むしろ多元的な社会集団の存在はインドにはつきりとあります。そして、むしろこうした多元的な社会集団が、政治経済的な主体や組織単位として働いているという事情があります。つまり、インド的な社会文化的な特徴を保持したままに、インドはグローバルな成長と民主化をとげているわけです。

●多元的民主主義のインド

そこで私がやろうとしたことは、インドの生活世界のなかに維持されてきた、私がここでいうヴァナキュラーな社会関係や価値というものと、グローバルに広がる民主政治や市場経済がどのように接合しているのかを明らかにすることです。「ヴァナキュラーな」という言葉には、「在地の」「俗語の」という意味があります。植民地時代においては、英語が政治や経済に参加する者の言葉であり、

在地のヒンディー語やオリヤー語は、いわば農民が自分の生活のなかで語る言葉にすぎませんでした。しかし現在は、近代的な民主化の制度や価値、そして市場経済の制度や機会が、民衆の生活世界にまで広がるなかで、そこにおけるカーストや宗教を含む社会関係や価値、そしてそれを在地の言葉で語ることで、全体の政治経済の動きが結び付いている状況があるのではないかというのが私の大きな見通しです。

一九九〇年代以降、都市と農村の関係は大きく変わっていきま

す。昔は都市には大地主や資本家、専門職、商人などが住み（もちろん労働者もいました）、村には主に農民や職人などが住んでいたという状況でした。が現在は、村人たちが非常に活発に消費活動を行い、教育を経て都市に行く。それでは都市化のみがどんどん進んでいくのかというと、そうではなくて、都市に行った人がまた農村にお金を送り、また政府の再分配や開発政策が充実して、農村経済が潤うなかで、農村は人間を生み育てる場としての重要性を維持している。それで農村に、英語で教育する私立学校ができた、いろんなものを売る店がどんどんできたりという形で、インドの農村が

経済的にも非常に活況を帯びている。これは中国などと比較すると、大きく違うところだと思います。中国では都市を中心とする経済が進展するなかで、農村、農業、農民の危機という三農問題が議論されていますが、インドの場合はむしろ都市と農村の密接なつながり

のなかで、農村が消費の需要を支え、そして人材供給を支えるといった、補完的關係が見られます。人びとの生存基盤を農村が支えながら、都市がインド全体の政治経済的な発展をリードしているという、これまでにないような新しい発展の姿を見せているのではないかと考えます。

そしてそのなかで、インドのカーストや宗教の多様性というものも、政治経済の発展を邪魔するものではなく、むしろそれを支えているという側面があります。これまで歴史的に蓄積されてきた多元的な知識や技術を基盤とする多元的な社会集団の存在が、今のインド経済の活況を支えているのではないか。たくさんの多様性があるからこそ、政治的にも非常にさまざまな多元的な意見が活発に議論されるし、また、経済活動（交換）にしても、差異こそが経済活動を支えているとすれば、インドほど違いがある人たちがいるとこ

ろはないので、そうしたいいろいろな違いを持つている人びとのあいだで交換があるということではないかと思えます。これまで多様性はネーション統合にも市場経済にも不利な要素としてしばしば語られてきましたが、むしろ今は相互作用と交換を活性化する資源として、多様性に注目する必要があるのではないのでしょうか。

そのなかで、私が「ヴァナキュラー・デモクラシー」と名付けたものについて一言ご説明申し上げます。現在、村のなかで何が起っているか。いろいろな多元的なカースト集団が民主政治のなかに参加しています。村落の自治体メンバーとなった下層民にインタビュールしたときに彼らが語ったのは「私たちはみんなに奉仕をするために政治に参加している。私たちは私たちの義務を果たさなければならぬ」ということでした。ここまで聞いたところでは、私は、インド人は宗教語りが好きだから、「奉仕」だとか「義務」だとか、耳に心地よい言葉をいっているだけだろうと思っていたのです。しかし、いろいろとインタビュールを続けているうちに、下層民たちが「われわれは自分の仕事を奉仕としておこなって配分を受ける。そして、その配分というのは公正に

なされなければならないのだ」というわけです。国家の資源が、さまざまな開発プログラムなどで、さまざまな社会集団や地域に分配されますが、それは公正に配分されなければならぬ。この「配分」という言葉も、「奉仕」や「義務」とならんで、インドにおいて古くから供儀のシステムに関わる言葉として使われてきたものです。全体のために自分の義務と奉仕を行い、自分の配分を受け取るというのが、基本的な供儀の思想と実践の枠組みです。つまり、下層民たちは、自分たちが政治に参加し、適正な資源の取り分をもらう権利を主張する言葉として、このような供儀倫理に関わる言葉を使用していたわけです。

●多様性の中での協力を維持する仕組み

インドにおいて古くから多元的社会集団の共生を可能にしていた文化的な思想やシステムに関わる言葉というものが、現在の政治のなかで多元的な社会集団の参加と協力そして権利を主張する言葉として使われているということに、私は非常に驚きを覚えました。もちろん、村人たちは、これらが深い歴史に支えられた言葉だということとは全然知らないわけですが、

そうした少なくとも18世紀から続くような在地の生活世界における、つまりヴァナキュラーな生活世界と言語に基づく思想や言葉と、現在の多元的な社会集団が政治参加をするというデモクラシーの制度や価値が結び付いている状況がそこにあつたわけです。これを私は「ヴァナキュラー・デモクラシー」と名付けました。こうした状況は、私たちのこれまでの民主化のイメージである、だんだんと在来の文化的価値や社会関係という邪魔者がいなくなつて、みんなが伝統社会から自律した平等な個人となることによつて、初めて民主化が達成されるというモデルとは大きく異なるものだと思つています。

今はリベラル・デモクラシーが主流の考え方ですが、リベラル・デモクラシーはリベリズムに依存しているデモクラシーです。リベリズムというのは、自由で平等な個人が共同体から離脱することによつて成立するということですが、前提としてあると理解しています。

しかし、この本でもリベリズム対コミュニケーションリズムの議論などを紹介したとおり、人間が自由であるということと同時に、どうやってみんなが協力してひとつの

政治共同体をつくれるのかということが、民主主義にとつてはとても大事です。つまり社会の多様性を伸ばしつつ、同時にそれらの協力を確保すること、この課題に答えていくことが重要なのです。このことは人類社会にとつて普遍的な課題でもありました。そして、こうした普遍的な問いに対して、さまざまな答えが歴史のなかで現れてきた、というのが私の立場です。世界のなかの多元的な地域で、どのように人びとの多様性を承認しつつ同時に協力を可能にできたか、そこにはそれを可能にしていた文化的なしくみ（制度や価値）がありました。それを私は文化資源と呼んでいます。そのひとつとしてカーストという工夫がインドではあつたと、私は考えています。

もちろん、カーストには歴史上ネガティブなところがあつたことは間違いありません。そして、そのことについてはインドの人びと自身がとても深く認識しています。下層民はカーストのなかにあるヒエラルヒーや支配の側面を非常に強く批判しながら、同時にカーストが多元的な社会協力を可能にしてきたという側面を取り上げることによつて、われわれは何々カーストであるからこそ、全体のために政治参加をし、配分を受け

取る義務と権利があるのだ、ということを手張できるようになっていくところに注目したわけですね。

このような、多様性と協力を双方ともに可能にするような社会・政治関係を支えているのが、多一論に支えられた存在の平等という価値ではないかと私は思います。多一論というのは、一なる存在があると同時に、その存在論的には絶対平等であるものが、さまざまな多元的な姿をとって、つまり差異を持って現れるという考え方です。人間も存在論的には平等であると同時に、現象界においては、さまざまな違いを持って現れる。それは人間社会においては例えば多元的な社会集団として現れるわけです。そして、その多元的な社会集団の多様性を尊重しながら、しかし同時に、全体として、一として、存在の平等性を基礎として、協力を成し遂げようという多一論の考え方が、現在の南アジア的な民主政治にも反映されているのではないかと考えています。拙著では、これをヴァナキユラー・デモクラシーの可能性という形で議論しました。

このような形で、現代世界に与った「地域の潜在力」を見つけていく。そして、それがグローバルな技術・制度・価値といかに結

び付き得るかということを示す。これが地域研究者・人類学者としての私のすべきことかな、と考えています。グローバル化は、地域の文化を捨象してしまうのではなく、むしろ多元的な地域に蓄積された地域の可能性がグローバルな価値や制度と結び付いていく過程でもあります。こうした地域と世界の切り結びの過程にこれらも注目しながら、研究を進めたいと思っています。これが多元的なグローバル化という、これからの世界秩序のあり得べき姿への学術的な基礎を与えることにもなるのではないかと考えています。

●グローバル化のなかのインド

最後に簡単に私が考えるこれらの課題について触れて、終わりにさせていただきます。そもそもインドは、ユーラシア大陸の真ん中、インド洋の真ん中において、多文化接触領域であったと考えています。ですから、現在はグローバル化のなかで多文化の共生ということが大きな課題となっておりますが、それを歴史的に一番真剣に考えざるを得なかった地域、実験場としてあったのが、南アジアという地域であったのではないかと、と思います。

そして歴史上、多様性、多元性

というものを維持し、発展してきたインドの可能性が、今、グローバル化のなかで、開けているというのが現在の姿ではないかと考えています。これを私はグローバル・インドという枠組みで考えています。生態的にも非常に入り組んだ形で、多元的な生業を持つ多様な社会集団が密接に交換、交流するなかで暮らしてきたインドというものがあります。

インドの文明の大きな特徴は、中国と比べると簡単にご理解いただけると思いますが、ひとつの中心が文明を決めるのではなく、多中心であったことにあります。そして、その多中心のネットワークのなかで交流、交換、交易を進めることで全体の豊かさを発展させていったということです。「多元性の接触・共存・展開」がそもそもインドの歴史のダイナミズムを支えており、これがグローバル化のなかでさらにポジティブな可能性を提示しつつあるということではないでしょうか。

これからも、総合的でグローバルなマクロな視点と、日常のミクロな生活世界への視点を両方大事にしなが、もっと分かりやすい形で、これからのグローバル化において、インド的な多様性と協力の確保の仕方が持つ意味を提示し

ていけたらと思います。

ところで、二年前の二〇〇九年より、人間文化研究機構が主催する「現代インド地域研究」推進事業が始まりました。六つの大学・機関（京大・東大・広大・民博・東北大・龍谷大）において現代インド研究拠点ができ、ネットワーク型地域研究推進事業を行っています。このプログラムでは、京大が中心拠点となっており、この事業の総括責任者を私がさせていたでいます。こうした事業を通じて、現代インドをより総合的、学際的に、また長期的な視角から比較と連鎖のなかでとらえながら、グローバルな意味を持つインド研究を展開していくことができたら、またそのために、専門の異なる人びとのあいだでもお互いに分かりあえるような言葉、分析枠組みをつくっていったらと考えている次第です。

ご清聴どうもありがとうございました。この受賞を励みとして、これからもよりよき世界のために少しでも寄与できるような研究を続けたいと思います。今日は本当にありがとうございました。

（たなべ あきお／京都大学大学院 アジア・アフリカ地域研究研究科）